
我輩はつんでれ猫である。

過酸化水素水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我輩はつんでれ猫である。

【Nコード】

N7551N

【作者名】

過酸化水素水

【あらすじ】

大昔から生き続けている、とある猫の人間（飼い主）観察記録のようなお話です。

1話は基本的に1000文字程度になると思います。なので、暇潰しにでもお読み頂けると嬉しいです。（ が付いているのは微妙なイラスト付きの意です。一部イラストありきで書かれている話もあります）

自己紹介なのである (前書き)

どうも、過酸化水素水です。

どうしても、衝動が抑えられなくなり、またもや連載を再開してしまいました。

基本的にイラスト付きの、ゆったりした話です。

最終的には、感動的になるのかもしれない気がするような感じがしています。

他連載の合間に投稿しますので、更新頻度は遅いかもかもしれません。

自己紹介なのである

> i 1 1 5 1 1 — 1 4 8 6 <

我輩は猫である。

ただ、名前は付けられている。

我輩の世話をしたいという大きい奴らに、よって付けられたのだ。

我輩としてはあまり気に入ってはおらんだが……まあ、そこは

大目に見てやっている。

何せ、今の世を闊歩している人間など、我輩にとっては赤子同然なのだ。

というのも、我輩は人間などの脆弱な種とは異なり、遙かな昔から生き続けている。人間如き輩が今の繁栄を築くより以前の、まだこの地の生物の一種に過ぎなかった時代から。我輩の同族が、まだ人間に世話をさせてやり始める前の事である。

実際の齡は、我輩自身も忘れてしまった。

まあそういう事なので、人間のやる事などは我輩にとって兎戯にも等しいのである。あまり気に入らない名前も、甘んじて受けてやっている。

感謝するが良い。

そして今、我輩が世話をさせてやっている者達の事を話そう。

我が住処と決めた家の者だという事もあって、ここの住人は人間にしてはマシな奴らである。

なればこそ、我輩も世話をする事を許してやっているのである。

住人は、我輩をこの家に案内した人間のメス。我輩に食事を供えるメス。そして、そのツガイと思われるオスの三匹である。

我輩をこの家に案内したメスは、最初に出会った頃からすると、比べ物にならないくらい大きくなった。同族では考えられない成長である。まっこと人間とは不可解である。

だが、このメスは流石に我輩が認めてやった人間という事はある。我輩を敬い、その行動を尊重する姿勢が端々に見受けられる。我輩を撫でたがるのが玉に瑕だが、まあそれは勘弁してやっている。我輩の寛容な心をしかと胸に刻むが良い。

本来ならば、主従の関係で言えば、我輩が主であることは言うまでも無いが、とはいえ我輩ももういい大人である。道理は分かっている。この家の中では新参者である我輩が、主を気取る訳にもいかぬのだ。

仕方なく、まっこと仕方なくではあるが、このメスの事を”主人”と呼んでやっている。

有り難く思えよ、人間。

長年の観察によって、我輩と最も長く一日を共にする、食事を供えてくるメスは、どうやら主人の母親であることが分かっている。ならばそのツガイであるオスの方は父親と言う事になるのであろう。まっこと遺憾ではあるが、主人の両親であれば、あまり無下にも出来ん。という事もあって、我輩は彼等の同居を許しているのである。

ただ、不満が無いわけでもない。

主人母親の方はまだ良いのだが、オスの方。こいつは、イカン。

そもそも、これは人間全体に言えることだが、オスはどうにも臭くて駄目なのだ。小便のような匂いがする。

このようなオスから、どうして主人のような良い匂いのするメスが生まれたのかは、今尚、我輩の疑問の種である。

太古の昔から生き続けている我だからこそ分かる。人間と言う種は、まっこと愚かな種である。

ともあれ、我輩と住処を共にする者達である。年長たる我輩が、
導いてやらねばならぬだろう。

自己紹介なのである (後書き)

なお、作者は猫を飼った事はありません……orz
なにか色々おかしい点があるかもです。ご了承ください。

1： オスは許せぬのである

人間にしてはマシな方だ、と多少は認めてやっている我輩と住処を共にする連中だが、当然不満が無い訳ではない。

まあ、主人は及第点をやっても良い。流石、我輩に”主人”と呼ばせる存在である。

問題は他の二匹なのだ。

先ず主人の母親の方。

このメスの煩い事煩い事。

四角い箱を前にして、日がな一日がはは、と笑っている。

その騒音だけで、我輩の眠りを妨げる要因となるのに十分であるが、それ以上にイカン事がある。

”そうじき”なるもの。これを操る時は、この上なくイカン。

騒音はもとより、あの何者をも吸い込もうとする力。昔、一度うっかり吸い込まれそうになった事があるが、あの時は生きた心地がしなかったものだ。

そして、これを操る時。このメスは分不相応にも我輩を邪魔者扱いするのである。

まっこと腹立たしい。

そんな凶悪な得物をちらつかせて、我輩を脅すとは……。

まっこと許せぬが、こやつは我輩に食事を提供する殊勝さも持っている。

それがあるからこそ、勘弁してやっているのだ。

己の命が、我が寛容さの賜物である事を、しかと肝に銘じておくが良い。

次に、主人の父親の方についてだが……。

こいつは、イカン。

何がイカンかと言えば、前も語った通り、その匂いである。

人間のオスであるという種独特の臭さに加えて、更にこのオスは悪臭を発しているのである。

更に言うと、短く細い棒のようなものを口に加えた時が最も危険である。

そうすると、むわっと口から煙を吐くのだ。

その煙の臭い事臭い事。

我輩の端正な鼻が曲がるうか、と思うほどである。

近所の同族の話を知ると、中にはこの臭いが好きと言う者もいるが……。

我輩には気が知れぬ。

そして、そんな悪臭を発していながらこのオス。事もあるうに我輩をベタベタと触ろうとしてくるのである。

近くで持ち上げられた時など、まるで拷問である。

必死に抵抗するのだが、どうやらこのオス。我輩が喜んでいと勘違いしているようなのである。

まっこと、度し難いオスだ。早い所、狩るべきだろうか……。

> i 1 1 5 3 5 — 1 4 8 6 <

……む！

嫌な気配がすると思ったら、オスが我輩に近づいてきている。

何だ、その笑みは……？！ ……まさか、我輩を抱き上げようと言うのか！？

や、止める！ 近づくな！

来るなど言っている！ 分からぬのか！！

や、止める、我輩を、我輩を抱くな！ 我輩にその臭い息を吹きかけるなあ……！！

う、うにゃああああああああああ。

2： 安物は認めぬのである

食事についてである。

我輩は基本的に肉を好む。何しろまだ同族が野にて狩りをしていた頃から、我輩は生き続けているのである。

すっかり牙を抜かれてしまった、嘆かわしい同族とは異なり、我輩はまだ野生を忘れた訳ではない。

狩りとて、やろうと思えばいつでも可能なのである。

とはいえ、今のご時世。例えば鳥などを狩ったりすると、あまり人間には喜ばれないのは我輩も知っている。我輩はものしりなのである。

人間にどう思われようと、我輩の知った事ではないのだが、主人に迷惑がかかるのはなるべく避けたい。

よって、今では精々、時折街の隅で見かける鼠をこっそり狩る位である。

昔は鼠を狩れば、人間などは逆に喜んでいた位だったが、今はそれすらもあまり良い顔はされない。全く人間とは勝手な存在である。

まあ、しかし。

人間が我輩に食事を差し出すのを、悪し様に拒否するのも大人気ない。

仕方なく我輩は、我慢して食べてやっているのだ。

特に”きゃつとふーど”なるものなどは、仕方無しに食してやっている。

だが、そんな我輩の温情を人間は理解していない。

我輩が分かっているか！

”きゃつとふーど”に優劣があることなどは、調べがついているのである！

我輩に安物を押し付けようとは……全くもって腹立たしい。昨日もそうだった。

まっこと許せぬのである。

………うむ。我輩は決めた。

もう安物を我輩に出してきても、我輩は絶対に食さないのである。我輩に食事をして貰いたくば、最高級のもを用意するが良い！

………ふむ。憤ったら腹が空いた。

そろそろ、食事の用意をさせるか。

我輩の食事は、この青い容器の中に入れられるのである。

最初はどうかと思ったが、中々に食べやすく、人間が我に差し出した物の中で、我輩は気に入っている物の一つだ。

コンコン。コンコン。

> i 1 1 5 3 3 | 1 4 8 6 <

この容器を前足で、こう………コンコン、と叩けば、人間は食事を用意するのである。

我輩がそう躑けてやった。

………どうやら母親が我輩の催促に気づいたようだ。食事を準備しようとしている。

うむ。感心なことである。

………ぬ？

貴様！ それは安物では無いか！

分らないとも思ったか！ 我輩は高級品を所望するのである！
これだから人間は……全く油断も隙もあつたものではない。

……む！？ 何処へ行く。高級品を用意していかぬか！！ 戻つて来い！

……くつ、行ってしまひおつた……。

ふんっ！ かのような食事。高貴なる我輩には相応しくない。誰が食してやるものか。

……。

……食さぬぞ。

……。

……。

……くんくん。

……ふ、ふんっ。

し、仕方ない。我輩は寛容である。今日の所はこれで勘弁してやるのである。

3： 狭い所が好きなのである (前書き)

イラストありきで作られています。

3： 狭い所が好きなのである

我輩は狭い所を好む。

ただこれは、我輩が、と言うよりも、我が種族の本能とも言えるのかもしれない。

狭い場所があれば、とりあえず入らずにはいられないのだ。

まだ昔、我輩が若かった頃は、獲物を狩る為に岩場の隙間によく潜り込んだものである。懐かしい。

……しかし、今それを思っても詮無き事。

今は今で楽しむしかないのである。我輩は前向きなのである。

岩場も良かったが、今はそれに匹敵する場所がある事を認めねばならない。

人間とは愚かな種であるが、その場所を生み出した事だけは、褒めてやっても良い。

無論、付け上がってもらっては困るが……。

まあ良い。

その場所であるが、それは人間が自分の鼻を拭くのに良く使う、四角い箱の中なのである。

中には拭き物が大量に入っているらしく、その拭き物が少なくなるまでは入れないのが、玉に瑕だ。

だが、初めてその中に収まった時。我輩は不覚にも言いよつた。い安堵感に包まれてしまった。

以来、我輩のお気に入りの場所なのである。

ただし、これには注意しておかねばならない人間がいる。それは母親だ。

かの人間は事もあるうちに、そのような我輩のお気に入りの居場所を、押し潰して直ぐに使えぬようにしてしまうのである。

まっこと腹が立……………むむ!?

今、その箱の中の吹き物が丁度無くなったのを、我が双眸が捉えた。

?! イカン!

母親が箱を潰そうと見つめている……………!!

そうはさせるかっ!

> i 1 1 5 3 4 | 1 4 8 6 <

まっこと……………落ち着くのである。

4：撫でさせてやるのである

我輩はまだ人間が今のような豊かな暮らしをする以前から、生き続けている。

今、この世にて我輩ほどの長寿を誇る生物はいない。

人間然り、同族然り。

故に、我輩は種として、最も優れた存在であると言える。

よつて、我輩はどんな生物からも敬われなくてはいけない。現代の世を席卷している人間と言えど、それは同じ事である。

つまり、何が言いたいのかと言うと……………。

我輩を撫でるが良いぞ、主人。

これは特別である。

我が主人として、立ててやっているのである。

なので、我輩の頭を撫でる事を許してやろうと言うのだ。

まあ頭の他は、顎の下でも良い。耳の内側でも許してやろう。更に言えば、尾の付け根辺りを撫でさせてやっても良い。

ただし、腹は許さぬ。

自分を無防備にするなど、野性味溢れる我輩からすると、あり得ない行為なのである。

我輩を、そこんじよそこらの同族と、同じに思ってもらっては困る。

この世で最も威厳のある、偉大な種なのだから！！

ともかく、我輩を一刻も早く気持ち良くするのだ。

これは今だけである。
今を逃せば、もう二度とこんな機会は与えてやらぬのだ。
だから早く撫でるが良い。

だが待て、撫で過ぎはイカン。

何事も、ほどほどと言うのが重要だ。

我輩が温情にて撫でさせてやっていると言う事を、忘れてはイカ
ンのである。

まあ、主人であれば、態々言わずとも分かっているだろう。
なればこそ、主人と呼んでやっているのだ

が。

何をしている。主人。

何故今、撫でるのを止めようとしたっ

！？

もう十分撫でたとでも思っているのかっ！？

誰が止めて良いと言った！！ もっと撫でなくては許さぬ！！

主人！？ 主人！！ 何処へ行こうと言うのだ！？ 待て！ 許
さぬ。認めぬぞ！？

し、仕方ない。ほらっ、腹を撫でさせてやるう。
だから早く我輩を、わしゃわしゃするのだ！！

5： 眠たいのである (前書き)

イラストありきです

5： 眠たいのである

主人は何やら学問に勤しんでいるようなのである。もう夜も更けているというのに、感心なことだ。

我が主人に相応しいとも言えるな。ものを学ぶと言ふ事は、人間だけでなく我が種族においても重要な事なのである。

とはいえ、万物の長たる我輩には関係の無いこと。眠気もあるので、そろそろ寝る事にする。

我輩はこの家の中に、幾つか寢床を持っている。

高くて狭い場所などは、我輩の好みの場所である。

ただ、現在。

我輩は、今いる主人の部屋の隅が、最もお気に入りなのである。

ここであれば、何者にも邪魔されないの、我輩は落ち着いて眠れるのだ。

そう言えば、聞く所によると、同族の中には人間の膝の上で眠る者がいるらしい。

まっこと嘆かわしい。

野生はどうしたのだ！？ 我が種族は狩猟種族であるぞ！！ その誇りはどうしたのだ！？

飼いならされおって……まっこと情けない事である。

我輩達は、飼われているのではなく、世話させてやっているのだ。その矜持を努々忘れるでない！！

ふん！ まあよい。

我輩はそのような者達とは違う。

幾ら我が主人だとしても、心までは許していない。
有事の際にはいつでも行動できるよう、常に警戒を怠ってはいない
のである。

全く……我が同族にも見習って欲しいものだ。

む……もう限界だな。

今日のところはこの位にして、眠るとしようか……。

> i 1 1 5 7 8 | 1 4 8 6 <

6：爪ときは重要なのである

爪研ぎは重要である。

狩猟種族として、常に己の武器は研ぎ澄ましておかななくてはならん。

我輩にはこの家に連れられてきてから愛用している、お気に入り
の爪研ぎ場がある。

それは、家の前にある一本の樹だ。

更に言うと、我輩がこの樹を爪研ぎ用に利用しているのは、ただ
爪を研ぐ事だけが理由ではない。

この家が我輩の縄張りである事を、他の同族に示しているの
である。この家は我輩のものなのである。

ただ我輩はその余りある程の知能に恵まれた反面、身体の大さ
はさほど恵まれてはいない。

口惜しい事だが、まあこれは言っても仕方無いことである。

なればこそ、工夫が必要なのだ。

後ろ足を伸ばして、より上の方を削るのである。

ふふ。我輩は賢いのだ。

しかし、最近理解に苦しむ事がある。

そんな爪とき場がある我輩に対して、主人が別のもので爪を研が
せようとするのである。

許せぬ。

これは我輩の権利の侵害である。分を弁えよ人間！

ふむ……………この巻きついているもの。

中々　　悪くない。

ぬうう……………良いな……………しっくりくる。

に、にはあああああ。

気に入った！　気に入ったぞ！！

今後はこれ、我が爪とぎ用に活用してくれようぞ！

ああ、大変満足である。我輩はとても気分が良い。

7： 見守ってやっているのである

今日も主人は机に向かって学問に勤しんでいる。
最近その傾向が高くなってきている。

感心なことではあるが、時には息抜きは必要である。

(ゴロゴロ)

学問を行う事に反対しているわけではない。
どんな種であれ、それは重要だからだ。

(ゴロゴロ)

我輩は完璧であるからして不要だが、我が同族にも見習って欲しいものだ。

(ゴロゴロ)

ただ、我輩はここでのんびりしておくのである。

(ゴロゴロ)

別に暇を持て余しているわけではない。

(ゴロゴロ)

主人が無理をせぬように、見張ってやっているだけなのである。

(ゴロゴロ)

嘘ではない。

我輩は太古の昔より生き続けている。この世の他の生物は皆赤子のよくなものなのである。

なれば、年長者として、我輩がそうするのもある意味当然の事なのだ。

(ゴロゴロ)

(ゴロゴロ)

(ゴロゴロ)

む？

主人。球を持ち出して何とする？

ふむ……なんだ。我輩に構って欲しいのか？

仕方がない。まっこと仕方がないが、相手をしてやるのである。

8： 身体は十分綺麗なのである

解せぬ。

まっこと解せぬのである。

それは、人間と言う存在についてだ。

何故彼奴らは、我輩を洗おうとするのであろうか。我輩が臭うとでも言いたいのか？

だとすれば、まっこと失礼な話である。

我輩は清潔だ。同族の中でも、綺麗好きな性質であると自覚している。

こうやって、いつも舌で綺麗にしているのである。

我輩は昔からずっとそうやって来た。それで十分綺麗になるのだ。なのに人間ときたら、少しでも隙を見せると、たちまち我輩を洗おうとしてくるのである。

あの水桶のある小部屋に我輩を連れ込んで、雨のような水が出るもので、我輩を水没させるかの如く。

許せぬ。

まっこと許せぬのである。

しかも、何が許せぬのかと言うと、日頃は我輩に従順な主人が率先して洗おうとしてくるのである。

これは我輩に対しての背信行為である。

なので、我輩は絶対に洗わせてはやらぬのだ。

今までの周期からすると、そろそろその時期である。これはどこかに避難していた方が良いのかもしれない。

この前は、小癩にも我輩を餌に嵌めおった。

食事の準備すると見せかけて、我輩を捕まえて強引に例の小部屋に連れ込んだのだ。

今思い出してもむかつ腹が立つ。

ただ、我輩を他の同族と一緒に思われては困るのである。

我輩は太古の昔からずっと生きてきたのだ。人間などより、よほど知能は高いのである。

二度と同じ手に引つかかることは無い。

……む。主人が球を持っている。

ふむ。また我輩と球遊びがしたいのか。

でかい図体をして、まだまだ子供であるな。

仕方ない。非常に面倒ではあるが、我輩が相手をしてやろう。

むう？ 我輩を抱き抱えてなんとする？

主人の部屋で戯れようと言うのか？ 仕方ない。それならば従ってやろう。

主人は良い匂いがするから、抱きかかえられるのは、それほど悪くないのである。

……主人？ そっちは部屋では無いぞ？

そっちには何も無い。そっちにはあの小部屋しか……？！

ま、まさか！？

主人！？ 主人！！ また我輩を謀ったのかっ！？

や、止める！！ 止めるのだ主人！ 早まるな、考え直すのであるっ……！

あ、や、に、によわああああああああ……。

9：住処が変わったのである

我輩の住処が変わった。

主人が今までの住処を離れ、新たな住処に移動したのである。

我輩もそれに連れられて、主人と共に新たな家での生活に入っている。

あの臭いオスと離れられたのは僥倖。

餌をくれるメスは、まあ達者に暮らせ。

だが実のところ、新たな住処に移動する事は、我輩はあまり好きではない。

気に入る隠れ場所の特定など、色々面倒なのだ。

同族には住処を変われば、情緒不安になる者も多いと聞く……。

気持ちは我輩も分からなくは無い。

ただまあ、我輩は長年を生きる偉大な種である。このような事はもう慣れっこなのである。

早速、隠れ場所探索と、寢床の構築に入ることにしよう。

しかし、今までの住処と比較すると、この新たな住処は狭い。なので、隠れ場所の特定も容易ではない。物が殆ど無いのだ。

そして、最近主人がやたらと我輩を構ってくるのである。

急に話しかけてきたり、我輩を撫でたりするのだ。

まっこと、鬱陶しい事この上ない。

我輩の行動を妨げようなど、十年早いわ！！

………とは言え、我輩も年長者として気持ちを察してやる。主人も隠れ場所が未だ見出せず、不安なのだろう。

仕方なく、我輩は主人を相手してやるのである。

もちろん、我輩は不安な事などはない。あくまで主人の為なのである。

まっこと、有り難く思えよ？ 主人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7551n/>

我輩はつんでれ猫である。

2010年11月27日17時25分発行